専門家会議

2020 年 2 月 2 日（日）
東京国立博物館　平成館第 1 会議室

2020 年 2 月 2 日（日）専門家会議

趣旨

北米・欧州・日本の日本美術学芸員及び関連部署の博物館職員が業務上で直面する問題などについての発表と討論、情報交換

会場

東京国立博物館　平成館第一会議室

議長兼進行

河野 一隆　東京国立博物館　学芸研究部 調査研究課長

出席者（敬称略）

（北米）

アーロン・リオ	メトロポリタン美術館
アン・ニシムラ・モース	ボストン美術館
フランク・フェルテンズ	フリーア美術館
スティーブン・サレル	ホノルル美術館
シネード・ヴィルバー	クリーブランド美術館
ヤヨイ・シノダ	ネルソン・アトキンス美術館
リアノン・パジェット	リングリング美術館
アンドレアス・マークス	ミネアポリス美術館
ローラ・アレン	サンフランシスコ・アジア美術館
ロジーナ・バックランド	ロイヤルオンタリオ博物館
グウェン・アダムス	ロイヤルオンタリオ博物館

（欧州）

ルパート・フォークナー	ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館
グレッグ・アーヴィン	ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館
ケイト・ニューナム	ブリストル市立博物館・美術館
メアリー・レッドファーン	チェスター・ビーティ図書館
カーウィン・チェン	スコットランド国立博物館
アルバン・フォン・ストックハウゼン	ベルン歴史博物館
メンノ・フィツキ	アムステルダム国立美術館
ダーン・コック	国立民族学博物館、ライデン
アイヌーラ・ユスーポワ	国立プーシキン美術館
エリザヴェータ・ヴェニアン	国立プーシキン美術館
ナデジャ・マイコワ	クンストカメラ（サンクトペテルブルク）
ヴィブケ・シュラーペ	ハンブルク美術工芸博物館
バス・フェルバーク	ケルン東洋美術館

コーラ・ビュルメル　　ドレスデン博物館
マニュエラ・モスカティエッロ　チェルヌスキ美術館

（日本）
梶山 博史　　中之島香雪美術館
古川 攝一　　大和文華館
安河内 幸絵　　サントリー美術館
伊藤 千尋　　永青文庫

（国立文化財機構）
河野 一隆　　東京国立博物館
今井　敦　　東京国立博物館
鬼頭 智美　　東京国立博物館
栗原 祐司　　京都国立博物館
マリサ・リンネ　　京都国立博物館
ヘルフェンベルガー・ファビエン　京都国立博物館
メアリー・ルイン　　奈良国立博物館
桑原 有寿子　　九州国立博物館
山梨 絵美子　　東京文化財研究所
江村 知子　　東京文化財研究所
米沢 玲　　東京文化財研究所

会議概要

はじめに司会から、全体の趣旨として、この会議が何かひとつのまとまった結論を出す、ステートメントを出すような場ではなく、いろいろな問題を共有して、ネットワークを築き、参加者が連携していくことを大きな目的としているという説明があった。

まず、前日のシンポジウムについて、コメント、質問が促された。出席者より、基調講演について、理想のミュージアムとして東博と民族学博物館さらに歴博を一緒にしたようなものを考えているというのは興味深い、また日本美術がいつまでもカギカッコ付で語られ、他の美術分野と同様に特別扱いされないようにはなっていないのはよくないのではないか、というコメントがあった。関連して主催者より、去年のテーマ「オリエンタリズム・オクシデンタリズムを超えて」に続いて、主催者としては、日本美術の多様性を一般参加者に示し、国ごと、地域ごと、館ごと、さらには学芸員ごとに違った日本美術というものがあり、「日本美術」というくくりも、国境としての日本の中の美術として考えるのではなく、いろいろな交流の流れの中で考えるということがあるのではないか、したがって、専門家は別として、一般の人が「日本」といっていろいろなイメージが浮かぶのと同様に、「日本美術」というのはいろいろな姿があって、それぞれがいろいろな関わり方をしているというのを見せようとした、との説明があった。シンポジウムのポイントとして、1.　キュレーターは一体何を展示すべきなのか、例えば来館者が求めるものを展示するのか、あるいは挑戦的な展示をするのかという問題提起、2.　展覧会の開催における財政的な成功と学芸的な意義のバランスについて、3.　博物館の展示におけるテクノロジーの利用の問題、の 3 点が挙げられた。

参加者から、日本美術（Japanese Art）と言っても自分の館では絵画や彫刻などのいわゆるファインアートから工芸品（アプライドアート）、また現代作品や写真まで扱うので、アーツと複数形で語っているというコメント、また、何を展示するかは学芸員の意思が必要である、とする意見があった。また、一方的に学芸員が上から

解説を提供することについての疑義が呈され、テクノロジー利用については、来館者の選択に任せられるよう使えるものを用意することが必要ではないか、といった意見が出た。

シンポジウムでの発表にあった「デュシャン展」のプロジェクトについて、西洋美術ではなく同じアジアのものを使ってのアプローチをしてはどうか、との話しから、今、日本美術は世界の中の日本美術としてとらえられ一国の単独のものとしての提示は少なくなっている、など各館がそれぞれの収蔵品に合わせて、さまざまな国や地域の文化を混ぜてテーマ別に紹介する展示の試みなどが紹介された。一方、そうした動きはともすれば専門家の存在意義が危ぶまれるのでは、との危惧が示された。そのほか教育普及活動、特に子どもへのアプローチの重要性と若者に向けてのテクノロジーの利用の是非、また日本の美術鑑賞教育の必要性など、活発に意見が交換された。

休憩をはさみ、５分プレゼンテーションが３本あり、各発表テーマに関連した討議を行った。

1. 創造性と健康な暮らしへの日本美術コレクションの活用
   ケイト・ニューハム（ブリストル美術館）

発表概要は、以下の通り：

日本の木版画とマンガなどグラフィック・アートは西洋諸国の大衆芸術の一部となっており、ブリストルの、M13 Crew and Phlegm によるヒルグローヴ通りにおける北斎作品を参照にしたグラフィティ作品(2009 年)はその例である。

ブリストル美術館は 500 点の木版画を含む 2000 点の日本美術作品を所蔵している。2018-19 年にかけて館蔵品による 3 つの日本木版画展を行った。まず 2017 年に北斎と広重の風景画展、次に江戸時代の都市生活を描いた作品展、最後に自然と季節の移り変わりに焦点を絞った版画作品の展覧会を行った。

展覧会は小展示室でそれぞれ 60 点を展示した。期待以上に人気となり、127000 人の来館者を得た。それは館の入場者総数の 31% を占めた。2,000 人の来館者による調査によれば、木版画は通常より若い人々に人気があり、多様な民族の人を集め、より広い地域からの来訪があった。来館者は木版画とそれを創り出した技術にとても刺激を受けた。

「美しい、夢のようだ、ありがとう」

「木版画を作ってみたいと思っており、制作過程を知ることができて刺激になっている」

とのコメントが寄せられた。

われわれはこの木版画展シリーズが、学生から地域のデジタル会社(Meteor Pixel)の職員まで幅広い人たちを引き付け自分の作品を作ったという事例証拠がある。

「Call of the Page」とともに、展覧会のオンライン版において俳句を募集した。ブリストルの版画作品に基づいて、30 か国から 800 の俳句が集まった。

「ファミリーの日」や大人向けの「ウルトラ‐ジャパン」といった日本の現代を扱ったイベントは満員だった。子どもと同じように大人もアニメに挑戦したり着物をきてみたりなどの遊びに熱心だった。

ブリストルの事業への来館者の反応は、日本コレクションは創造性や社交、また精神的健康に強い可能性を持っていることを示唆している。これには様々な要因があるようだ。人々は日本美術の職人技、ポップ・カルチャーとのつながり、日本の信仰、特に仏教に関するものに高い反応を示している。過去にあったように、日本美術は西洋の観覧者が違う世界に入る機会を与えているのである。

この発表の後、最近、「ブリティッシュメディカルジャーナル」に、博物館、美術館に行く 50 歳以上の人たちの早世リスクが低いという研究結果が「ブリティッシュメディカルジャーナル」に最近掲載されたことが紹介され、実際に自身の医師が癒しを求めて日本美術の展示館にきているという例も挙げられた。また、元軍人に向けてのプログラムの例があるということだった。

2. サステナビリティと学芸業務

メンノ・フィツキ（アムステルダム国立美術館）

学芸員の日常業務の中でいかに持続可能性に貢献できるか、という課題が示された。発表者から、アムステルダム国立美術館での部分的な展示室の夜間空調停止の事例や、クーリエとして他館に出向く際に飛行機を多用することへの疑問、また他館からの貸与によって構成する展覧会への疑問と自館コレクションをより活用することの意義が示された。また、展示ケースや展示具の再利用、オンラインプラットフォームを利用しての共同事業、収蔵品データベースの構築の意義、などさまざまな提案がなされた。一方、地理的気候的に航空移動が不可欠である、空調の短縮は不可能である、など環境問題への配慮が難しい例も示された。また、展覧会のマーケティング自体の考え方を変える必要があるとの意見も出た。脆弱な日本美術作品を自分たちの世代で使いすぎることへの疑問や、他館からの貸与品で構成する「名品展」ばかりで人を集めることへの疑問が示された。最後に、サステナビリティについて博物館は何ができるのかということをもっと考えるべきでその中で日本美術の専門家は何ができるか、すべきか、は継続して議論してゆく方針が示された。

3. 古川攝一（大和文華館）「小規模な美術館にとってのクーリエの課題」

発言概要は以下の通り：

発表者が所属する大和文華館のような小規模館にとって、作品の安全な輸送のためにクーリエは必要な業務であると理解しつつも抵抗感がある。その理由は以下の三点に集約される。

①手続き（輸出入・サイテス）の不安

②そもそも経験が少ないことへの不安

③クーリエとして一定期間の海外出張は、残された学芸員の日常業務負担の増加を招くことへの抵抗感

海外の美術館・博物館からの出陳依頼にはできる限り協力したいが、現実にはクーリエの問題が支障となることが多い。解決方法の一つは、国立博物館や文化庁が開催館と貸出館の間に入り、作品の借用や手続きを代行することである。ただ、国立博物館や文化庁から作品を借りない場合、担当者が忙しい場合には協力を得ることは現実的ではないし、負担軽減に配慮しなければならない。

したがって、日本国内から作品を借用して展覧会を企画する際には、企画あるいは構想段階から、国立博物館や文化庁との調整の要否や、あるいは公立館にその役割を依頼するのか、貸出館にクーリエを依頼するのか、日本国内の貸出館同士のつながり（各館の担当学芸員が互いに相談しやすい環境作り）にまで配慮して準備すると、クーリエ経験の少ない館にとっては貸し出ししやすくなると考える。あくまでも主体は開催館（企画者）であり、細やかな情報交換、相談を通じて、各館の担当者との人間関係をうまく構築することが、展覧会成功の鍵となるものと思われる。

これについて、なぜこうした協力関係が必要かというのは急には理解できず、日本で作品を貸し借りする場合は人のつながりが非常に重要であることは徐々にわかってくるというコメントがあった。実務的には複数の所蔵者のものを一か所に集めたうえで輸送すれば効率が良いのではないか、という指摘、それについては持続可能性の追求というのも理由になるのではないか、という意見があった。クーリエについては、館のシステムで必ずしも学芸員が行くとは限らない、という指摘があり、また日本の展覧会の「名品主義」が海外からの貸与を増やしているとの指摘、さらに貸与に関するペーパーワークを減らすべきとの意見が出た。

この後、日本美術のデータベースについて経過報告があり、INJA（国際日本美術ネットワーク）の WEB サイトの紹介と利用法、登録方法について説明がなされた。